



《第118 (定期) 教区会 開会演説》

新しい教会の有り様に

向けて意識の変革が必要

主教 アンデレ 大畑喜道



「わたしたちのひとつの体は、多くの部分から成り立っている、も、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちは数が多いが、キリストに結ばれて一つの体を形作っており、各自は互いに部分なのです。」

(ローマ12・4)

◇はじめに

本日は休日にも拘らず東京教区教区会のためにお集まり頂き本当にありがとうございます。心から感謝申し上げます。今回の教区会では昨年度の決算、そして各活動の総括報告が主なものとなります。また先の教区会で継続審議となった議案や貧困問題に関する議題などについてもご協議いただきます。この一年の働きを神に感謝しつつ、これからの教区の歩みについて一緒に意見の交換をしていくことができたと思います。

大震災から一年が経ちましたが、いまだ安否が確認できずにご家族やご友人を捜している方々、各教会においても祈りをささげていただきました。信施の奉献や募金へのご協力もいただきました。聖職や信徒の方々が、被災された地域に向かい、避難されている方々に寄り添おうと活動してくださっていること、また祈りの応援をしてくださっていることをありがたく思います。大震災後、教役者会の呼びかけによる主教座聖堂での聖餐式を今年も引き続きお捧げすることにしました。地震や津波の被害に遭われたかたがた、原発事故の犠牲となつていらっしゃる方々のため、また悲しみや辛さの中にある人々と連帯している東北教区を始めとして日本聖公会の信徒、教役者のために黙祷を捧げることから始めたいと

思います。

◇各教会の特色を生かして

今年は教区の宣教について話し合う機会がたくさん与えられています。2月には箱根に一泊ではありましたが、各教会の代表、教区の委員の方々が集まり、意見の交換を行いました。互いが様々な意見の交換や思いを出し合うことができたことは本当によかったと思っています。また昨年から続いていることですが、今年の9月に浜松で行われる管区の宣教協議会に向けて様々な準備がなされています。「私たちの宝物」というアンケートには各教会の皆様がご協力いただき、教区の教会が様々な試みをしていることを分かち合うことができました。管区の宣教協議会を前に、教役者が宣教について話し合いを深めようと準備をしています。一つの形になつていくためにはいまだ少し時間が必要であると思いますが、東京教区が宣教共同体として一致していくことができるように皆様のご協力をお願いします。宣教の課題は整理されても、そ

れを各教会がすべて同じようにすることはできません。いろいろな特色が出てくることは大変に素晴らしいものだと考えています。そのために、各教会では、自分の教会の働きの特徴やおかれた地域の特色をよく吟味し、優先順位をつけて励んでいただきたいと思います。

◇もう一度歩みを見直そう

神様のご計画は私たちには理解したいものがあります。昨年起こった東日本大震災もそうです。「神は愛である」といいたが、一瞬にして大切な多くの命や財産がなくなり、また原発事故は全く収束のきざしも見えない状態にあります。私たちは、本当に神は愛なのかという信仰の確信を揺さぶられ続けています。東京にも被災され避難されている方々が大勢おられます。家族の離散や離職などによる貧困の問題は大都市東京の中です。ますます大きな課題となつていきます。教区の宣教課題の大きなテーマであると思います。あらゆる人々の利便さや快適さのために、他の人々の命や健康、財産、

希望などを犠牲にしていくな社会構造に対して、教会は何をしてきたのでしょうか。平和

国家の樹立という旗印の下で、私たちは経済成長をし続けてきました。教会もその問題性にう

すうす感じ、気づきながらも間違った力に抗することはできませんでした。主教会の3・11

のメッセージにもあったように、自分たちのライフスタイルの大転換を求められていると考

えます。豊かで快適になろうとする欲望に私たちは翻弄されてはいけないように思います。被

災された多くの方々の小さな声をどのように聞いているのか、聞こえているのか問われています。

「神は愛ならそんなことは起こるはずはない。」と信仰を揺さぶられるということは、ある意味人間がすべての自然をコントロールできるという過信、傲慢

な思いがあるのではないかと思います。神は、「今こそ、犠牲になつた多くの方々から発せられている声を聴きなさい。その声から今こそ自分たちの今までの

生きてきた歩みをもう一度見直しなさい」と言っているようにうに、教会活動は行われますが、聖書研究会や礼拝などは二

つの教会が互いに話し合い、共同で行えることは行い、調整が可能なのは積極的に実施していく、互いの教会の課題や宣教

の目標などを積極的に分かち合い、新しい教会の有り様に向けた意識の変革が必要になっていくと思います。またそのためには両教会の信徒は、互いに今ま

で以上に祈りあい、協力しあう体制を作っていかなければなりません。そこには互いの信頼関係が生まれなければなりません。具体的には何が必要になり、

何が問題点であり、どのようなことをしていけば解決することができるかということをお模索していただきたいと思います。これはこれからの東京教区でどうしても避け

られないことです。そしてこの二つの教会だけではなく、他の教会でも同じ様に、他の教会との協力が必ず必要になってきま

す。◇重荷を分かち合つて神によって招かれたものが、

す。神の声を聴き、自分を変え

る勇氣を持つ必要があると考えます。使徒聖パウロは自らを主の僕

と言っています。神は一人一人をどのようにお使いになるかは分かりません。しかし主の僕として日々、聖書のみ言葉に生か

されていく必要があります。瞬間、瞬間神は私たちに生き方の指示を出し続けてきました。その結果や結論は私たちにはすべてを把握することはできません。

だから大きな間違いを犯してきたのかも知れません。時には自分の勝手な解釈や欲望が神

のシナリオを変更させてきたのでしょうか。子供のころ、神が絶対的な存在であるならば、神はどうしてこうしなければならな

いと言ってくれないのだろうかと考えたこともあります。もつとも、こうしたささいといつても人間は神の言うシナリオ通りに動くものでもありません。都合のよい理屈をつけて聴き従わな

いでしょう。神は人間の罪深い生き方を時には放置されます。人々は十字架にイエスを釘付け、神の子ならそこから降り

ともに手を取り合い、和やかに奉仕活動をする。また互いに責任を負いあう体制を作ってい

く。そのために変化することをお恐れてはいけません。男性も女性も教会の宣教の担い手である

自覚を持つ必要があります。自己訓練も必要となってくるでしょう。課題も問題も多いかと思

います。対立も出てくるかも知れません。競争心や抵抗もあるかも知れません。しかし最初

から何も新しいものは生み出されていきません。あきらめや絶望ではなく、新しい宣教の方向性

のために協力し合う体制が構築されていくことを願っています。信仰者の多様な働きを、それぞれに与えられた賜物を生かしあいながら奉仕に専念したいと思

います。何年か後には、東京教区はこの体制でいくしかなくあります。そのために今から

て来いと嘲笑します。しかし神

は彼らのなされるままにされま

す。人間がどのように、自分の僕として生きるかを忍耐を持つて待つておられます。しかしだ

からといって自分勝手に、自分の欲望を推し進めて行つてはなりません。◇教役者の不足と協力体制

東京教区、また日本聖公会全

体にも通じる様々な課題について少しお話ししたいと思います。議案書を見ていただきますと、

教役者議員は39名おります。日本聖公会の中では一番多くの教役者がいると思いますが、35名の司祭のうち、学校や施設やその他の働きのために11名が

出向しています。教会の数は33教会9礼拝堂ですから、単純にいつて、出向していない24人の司祭

で33の教会を牧会することになります。定住の牧師を派遣することができずに既に何年も経過

してしまっている教会が何教会もあることを辛い思いをもっており

ます。またこれから数年の後には多くの退職される教役者がおられます。また健康を害さ

も積極的に近隣の教会と協働体制を作っていく可能性を模索してい

つていただければと思います。互いに与えられた賜物を分かち合い協力し合いながら成長

していくチャンスが与えられていると考えたいと思います。困難なことを考えていくと暗い気

持ちになります。あれもできない、これもできない。高齢化して教会に集うことがなかなか

れたり、家庭の事情で牧会を続けることに非常に困難を覚えて

いる教役者がおられます。聖職者の絶対数が不足するという現

実は今分かったことでもありませんし、みんなが心をいためていたところ

です。だからといって定年をすぐに延長するわけにもいきませんし、お一人の方が

聖職志願してから聖職者となつていくには十分な時間が必要で

す。昨年の教区会のおりにもお話をさせていただきましたが、もはや一教会一定住牧師という形

態はとることはできません。学校や病院に派遣されている教役者には独自の使命があります

ので、その派遣数を減少させることもできません。教区内教会間の協働ということが重要にな

つてくるでしょう。たとえ定住の牧師がいなくても教会があり続ける限り、そこには牧師がい

ます。法規上、管理牧師は牧師の職務を行うとされています。管理牧師といえどもその教会の全

責任を担い、牧会を行います。しかし現実には教会委員会のあ

るときだけ、何か起こったときだけに責任を担ってもらうとい

教のために召しだされていることを自覚していくことができま

すように願います。互いに祈りあい、支えあつていくことがで

きるように教役者も信徒もまい進してまいりま

う意識もあつたように思いま

す。四月の人事において一つの試みをしています。既に公示が出

されましたが、聖三一教会と聖十字教会は高橋顕司祭に二つの

教会の牧師になっていただくことにしました。もちろん、一人の司祭が同時に同じ時刻に礼拝

をささげるということは不可能ですから、物理的に礼拝をささ

げるときには学校などに出向されている司祭や既に退職された司祭たちの協力をいた

だり、また時間の調整を図るなどという工夫は不可欠です。管理牧師体制と兼牧一人の司祭が複数の教会を牧会することとど

のような相違があるのかとお考えになる方もあると思います。今までの意識では管理牧師体制

は、どちらの教会が主で、どちらかの教会が従というような関係のように見られてきま

した。そうではなくて、どちらの教会においても牧師である。二つの教会がその独自性や、お

かれた地域での宣教の課題を堅持しつつも協力しあつてやっていく。管理牧師体制の時と同じよ

れを送り出すとすれば各教会の負担も出てくることですが、重荷を分かち合つていきたいと思

います。何人かの司祭には東北教区に短期的な出向をしていただき、東北教区と私たちが連帯

していきたくと思っています。具体的には月に十日間程度、主日をはさんで、「いっしょに歩こう！プロジェクト」釜石ベース

と釜石神愛幼児学園を応援することになっています。そのため

しておりますが塚田重太郎聖職候補生は英国において勉学中ですが、学位をとるべく頑張っています。この春からは家族が渡

英します。祈りと励ましを与えていただければと思います。またジョン・ストーゼンバック聖職候補生は日本での聖職志願の召命の道から、違う道を模索されてきました。本人から昨年末をもって認可の取り消しを申し出があり、今年になって認可を取り消し、現在は英国に行かれました。今後は今まで学んだことを十分に生かしていつて欲しいと思います。神様からの召し出しが新しく結実していくことを願います。また願わくは公会の奉仕職に召される人々が東京教区で沢山出てくることを切望します。また、聖オルバン教会のスコット・ウォーカー司祭は、6月末で臨時牧師を退職されます。今、招聘委員会が後任者の選定のために努力してくださっています。教区全体で聖オルバン教会のため、また招聘委員会のために祈りください。上田亜樹子司祭、上田憲明司祭も宣教師として東京教区にご奉仕いた

だきましたが、一時チャプレンの任を解かれて東京を離れることとなりました。

最後になりましたが、12月末日で長い間ご奉仕された小川昌之総主事をご退職され、4月からは新しい教務主事になります。皆様には新しい体制で教区事務所が動き出すまで少し不便や混乱があることをお許し願いたいと思います。3月末日で、小野里俊一執事が定年退職、事務所職員の麻田奈々子が退職されます。公会に永くご奉仕されましたことを感謝申し上げます。また現職を退かれましても、健康に留意されて、神のみ言葉の仕え人として今後ともご活躍されることを期待しています。また復活日以後、吉野秀幸司祭は一時休職をされます。ご自身の健康とご家族の健康をお祈りしたいと思います。残された教役者は先輩諸氏が必死で示してくださった道を心して進んでいきたいとこのように思います。長い開会の挨拶になります。ご清聴感謝申し上げます。